

戻り橋と陰陽師

1、戻り橋

戻り橋の名についてはこんな由来がある。

文章（もんじょう）博士の三善清行が亡くなったのは918年だが、その死去の知らせを聞いたその子の浄蔵（じょうぞう）・・・、彼は天台の修験行者で大峰山で修行中であったのだが、その彼が京都に戻ってきたとき、偶然父の葬列に出会った。そこで・・・祈祷上手の高僧・浄蔵が念じたところ、亡くなった三善清行が一瞬蘇生したと言われており、「戻り橋」の名がある。

注：浄蔵に関する私のホームページ

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/whatsnew/mitizane.html>

<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/kadoiwa.html>

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/huejyouzou.html>

映画・陰陽師（おんみょうじ）では、[安部晴明](#)の式神は蝶々の変身で、[密虫](#)という可愛い女だが、安部晴明が父親の惨殺死体を秘術の限りを尽くして蘇生させた場所も戻り橋である。

現在はそういう妖し気な雰囲気はないが、それでも地元の花嫁はけっしてここを渡らない。

注：その戻り橋の近くに安部晴明の家があったらしい。[現在は晴明神社になっている。](#)晴明神社から大通りの向こう側に堀川という川が流れていてそれに架かる橋が[戻り橋](#)である。大通りを堀川通りという。晴明神社は堀川通りに面しているのでわかりいい。バスストップからすぐのところであるので交通の便はすこぶる良い。戻り橋と晴明神社には是非一度はお出かけ下さい。堀川の東側にも道がありこれは東堀川通りという。同級生の佐々木清八君の家がその東堀川通りにあった。彼は毎日東堀川通りを下って私の家の前を通って朱雀高校に通った。お兄さんが碁会所を開いていて高校生の時に碁を教えてもらったこ

とがある。また、私は、家庭教師・重久（しげひさ）先生のところへ英語を習うため週に2回堀川通りを自転車で通ったものだ。その頃は清明神社に詣ったことはなかった。清明神社から歩いて5分のところに[白峰神社](#)という崇徳天皇と淳仁天皇の怨霊を祭った由緒正しき神社がある。堀川今出川から東に少し行ったところである。是非お出かけ下さい。なお、安部清明は吉備の人で現在その屋敷跡やゆかりのものが残っているらしい。大阪にも安部清明神社があり、そこが出身地であるとの話もあるが、どれが本当かは良く解らない。一度は訪れてみたいものだ。



映画で、博雅（ひろまさ）が戻り橋を渡って清明の屋敷に行くところ。

博雅（ひろまさ）と清明との付き合いの始まりだ！

戻り橋にはその後もいろいろと恐ろしい話が伝わっている。なかでも[渡辺綱（わたなべのつな）の鬼の話](#)が有名である。戻り橋の辺りはほんに恐ろし気なところである。そういうところに清明の屋敷があった。

映画によると、その屋敷事態もなんだか妖し気な雰囲気だ！

中世には、清明の屋敷に仕えていた人々がこの付近に住んでいたのだが、下層の陰陽師（おんみょうじ）もこの付近に住んでいて、この付近は陰陽師（おんみょうじ）関係の地域というおもむきがあった。往来の人々に占いをする人も多かったらしい。戻り橋は古来橋占いの行なわれていたところとして有名である。



映画に出てくる安倍晴明の自宅

注：下層の陰陽師については、山下克明の「陰陽道の発見」(NHKブックス)が詳しい。私のお勧めの本である。その要点を書いたホームページがあつて、それによると、「古来、祓は、神祇官人が大祓をおこなう朝廷・皇族の神事の場合だけであつたが、平安時代になると貴族さらに庶民まで祓を求めるようになった。これを行ったのが陰陽師であつた。河臨祓という人形と刀剣を以つて祟を祓う呪法があつた。」とある。

注：辻占（つじうら）は、日本で行われた占いの一種である。元々の辻占は、夕方に辻（交叉点）に立って、通りすぎりの人々が話す言葉の内容を元に占うものであつた。この辻占は万葉集などの古典にも登場する。類似のものに、橋のたもとに立って占う橋占（はしうら）がある。夕方に行くことから夕占（ゆうげ）とも言う。偶然そこを通つた人々の言葉を、神の託宣と考えたのである。辻は人だけでなく神も通る場所であり、橋は異界との境をなすと考えられていた。京都・一条堀川の戻橋は橋占の名所でもあつた。

2、陰陽師

陰陽寮は、日本の律令制において中務省に属する機関であるが、四等官制が敷かれ、陰陽頭（おんようのかみ）を始めとする幹部職と、陰陽道に基づく呪術を行う「方技」（技術系官僚）としての各博士及び陰陽師、その他庶務職が置かれた。

博士には陰陽師を養成する陰陽博士、天文観測に基づく占星術を行使・教授する天文博士、暦の編纂・作成を教授する暦博士、漏刻（水時計）を管理して時報を司る漏刻博士が置かれ、陰陽、天文、暦3博士の下では学生（がくしょう）、得業生（とくごうしょう）が学ぶ。

因みに天文博士は、天体を観測して異常があると判断された場合には天文奏や天文密奏を行う例で、陰陽師として著名な安倍晴明も任命されている。

仏教の伝来とともに道教の思想が日本にもたらされた。そして、飛鳥時代（7世紀）に陰陽寮が設置されたが、律令制度の発足とともに官僚制度も整備され、陰陽寮の組織拡充が行われた。

陰陽師がもっとも光り輝いたのはもちろん平安時代初期である。平安京建設という歴史上最大の国家プロジェクトがあったからである。

平安時代も嵯峨天皇の頃、空海がその霊力を発揮し、神泉苑での雨乞い儀式において陰陽師を凌駕してから、陰陽師は密教僧の後塵を拝するようになる。

しかし、その後、安倍晴明という超人が出て、陰陽道の復活が果たされる。そのまま永らく続いてゆくが、明治2年（1869年）に時の陰陽頭、土御門晴雄が薨じたのを機として翌年廃止された。

陰陽師は、他の官職との併任があったし、どうも秘密の仕事も命じられたようである。その典型が「鬼一法眼」だ。鬼一法眼は、室町時代初期に書かれた「義経記巻2」に登場する伝説上の人物であるが、戻橋付近に住んだ陰陽師である。『六韜』という兵法の大家でもあり、文武の達人とされる。源義経がその娘と通じて伝家の兵書『六韜』を盗み学んだという伝説で有名。また剣術においても、[京八流](#)の祖として、また剣術の神として崇められている。鬼一法眼が隠密であったということはいかなる文献にもなく、あくまで私の想像であるが、陰陽師が剣術家であったということは、彼が隠密であったことを意味しているのではないか。一部の陰陽師には、表向きの仕事の他に裏の仕事があったらしい。

なお、「式」には「用いる」という意味があるが、式神とは、陰陽師が使役する霊的存在のことである。目には見えないが、この世界には何か活動するもの（活動エネルギー）があって、人々に災いを及ぼしたり幸いを及ぼしたりする。前者は荒魂（あらたま）であり、後者は和魂（にぎたま）である。荒魂は怨霊とか悪霊、あるいはたちの悪い鬼や妖怪と考えても良い。和魂は通常私たちが考える神様のことである。前者の働きを抑え、後者の働きを鼓舞するのは、「呪力」による。陰陽師が使役した「式神」とは、その「呪力」の表象である。陰陽師が「式神」を使役したということは、人々の恐れを「呪力」によって解消

したということであり、そのような願いは、公家たちから始まり、次第に一般庶民からも出てくるようになった。そうして、下層の陰陽師が大いにもてはやされるようになっていくのである。大事なものは「呪力」であるが、これについては、私の著作「靈魂の哲学と科学」（未定稿）の第2章に詳しく書いたので、是非参考に読んで欲しい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/rei02.pdf>



大陰陽師が式神をひだり後ろに控えさせ儀式を行っている

([weblio辞書](#) より)

儀式において式神を使役するのは大陰陽師であり、下級の陰陽師はそれほど「呪力」が強くないので、下級の陰陽師が行なうのはせいぜい「呪い（まじない）」ぐらいであって、それも何かの儀式というのではなかった。下級の陰陽師は、一般庶民の願いに応じてさまざまな「呪い（まじない）」を行なった。大陰陽師の行なう式神を使役しての儀式は今では見ることができないが、下級の陰陽師の行なった「呪い（まじない）」はその後姿を変えて今に広く行なわれている。赤い腰巻き、人形（ひとがた）や流し雛（ながしび

な)、てるてる坊主、親指隠し、いわしの頭、逆さ箒（ほうき）、下駄の灸、さまざまな呪符などである。



天皇自らお刷りになった呪符・角大師

(<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/rosanji.html> より)



陰陽道呪符ネックレス

(<http://raitama.com/?pid=20092251> より)

呪符については、大宮司朗の「実践講座1、呪術・霊符の秘儀秘伝」（2010年10月、ビイングネットプレス）に詳しく説明されている。



呪術・霊符の秘儀秘伝

(<http://www22.big.or.jp/~bnp/reihu.html> より)